

パネルディスカツション

コードィネーター

佐藤 信（くまもと文学・歴史館館長、東京大学名誉教授）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授、東京大学大学院人文科学研究科教授、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事を歴任。現在、くまもと文学・歴史館館長、横浜市歴史博物館館長、東京大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

コメントーター

亀田 修一（岡山理科大学特任教授）

パネラー

小山田宏一（大阪府立狭山池博物館館長）

海野 聰（東京大学大学院工学系研究科准教授）

吉村 武彦（明治大学名誉教授）

長谷部善一（歴史公園鞠智城・温故創生館館長）

渡来系技術から見た古代山城

（会場）

佐藤信 それでは、そろそろパネルディスカッションを始めさせていただきます。私コーディネーターを仰せつかっております、くまもと文学・歴史館の館長の佐藤信です。

今日ご参加いただいている皆様の中には、昨年以前にもお聞きいただいている場合があるかなと思います。一昨年はオンライン座談会の形式で開催したと思います。今回は、少ししぼつて渡来系技術に焦点を当てて四名の報告者の方々からご報告をいただきました。非常に豊富な材料が出てきていると思います。まだまだ鞠智城について研究しなくてはならないテーマがいっぱいあるというところで、やや専門的かもしれませんけれども、お楽しみいただけたらと思つております。

一番最初に、朝鮮半島の考古学に詳しい岡山理科大学の亀田修一さんにコメントーターをお願いしておりますので、今日の報告も含めて鞠智城と関係する渡来系技術についてコメントをいただきたいと思います。お願ひいたします。



亀田修一 皆さんこんにちは。岡山理科大学の亀田修一でございます。よろしくお願ひします。

佐藤先生からコメントをということだったのですが、ご報告をなさつた皆さんは大先生ばかりで、僕からコメントするのはおこがましいので、感想を中心にお話をさせていただきたいと思います。



まず、長谷部善一さんが、鞠智城の全体像と朝鮮半島との関係、技術の関係をお話されました。その中で最初に発表された現在のインフラ整備と関わる話はとても興味深く思いました。と言いますのは、僕自身、考古学をやっているのですが、考古学は現在に通じると思ってやつておりますので、新しい半導体の工場がこの熊本にできるという出来事と同じような出来事が昔にもあつたという話は、そのとおりだと僕も思いました。特に最近古代の交通路関係に僕自身も興味持っていますので、そのように思いました。ご発表の内容に関しましては、いろいろ渡来系の技術というのがあるわけですが、この最初の選地の問題は、重要だと思いました。まず、日本列島の古墳時代以前には明確に城と呼べるようなものはありません。そして、日本の中世の山城は大体の場合は郭（くるわ）が尾根筋に並んで造られます。韓国、朝鮮半島は違います。そういう意味で、日本の古代山城の選地というのは、やはり古代日本の中からは出てきづらい、出て来ないのではないかと思つております。次に、版築ですね。この辺も今後もう少し細かく検討される必要があるのかな、と思い

ました。そして貯水池跡の話。これは今お話ししていいのかどうかわかりませんが、僕は以前から熊本県の方に貯水池をもう一度掘つて欲しい、貯水池を掘ることによつていろいろな話ができるだらうと言つてゐるんです。ただ、長谷部さんもおつしやいましたが、本当に貯水池を掘ろうとすると、今後腹をくくつて、お金のことも考えて、時間も考えて調査する必要があると思います。現在、城門を調査していきますので、それが一段落したら貯水池を是非ともお願ひしたいと思つています。といいますのは、やはり水氣のあるところを掘ると木簡が出てくるのではないか、と思つてゐるのです。年号を書いた木簡が出ないかと随分前から期待してゐるのです。こんなこと言つていいのかどうかわかりませんが、鞠智城築城頃の年号木簡がうまく出てくると特別史跡になるのではないかと期待してゐるのです。やはりそれだけのものをここ鞠智城は持つてゐると思います。木簡に書かれた文字資料の中には「秦人」も出でています。そういう話も含めて、渡来系の人達との関わりも見えるのではないかと思つてゐます。

次に、小山田宏一さん、三〇年近く狭山池と土木技術との関係を研究されている第一人者ですが、特に韓国的新情報も踏まえて今日ご報告いたしました。その中で特に面白かつたのが、いわゆる貯水施設とみんなが言つているものが、単にその意味だけではないのではないかというお話です。小山田さんは空間設計という言葉を使われていましたが、これはとても面白く思いました。そのような発想で見た方は今までいなかつたのではないか、と思うのです。僕自身も基本的にはこういう貯水施設

があれば、その中に貯木場があつたのではないかなどは思つてはいたのですが、空間的にどう見るのかというのは初めてで、とても面白く思いました。それから、小山田さんの報告の中で鬼ノ城の話が出てきて、その第5水門のところの貯水施設というか堤防状土手の話が出ました。それは、かなり立派なもので、ちゃんと土手になつていて、石垣があります。僕は岡山におりまして、鬼ノ城の発掘調査の時に何度かお邪魔しております。この貯水施設の中はやぶだらけで様子がよくわかりません。そして、さらにその上にも、もう一つ貯水施設があります。これはあまり知られていないかもせぬが、この上の池にもおそらく堤防があつて中の池の部分がし字に曲がっています。もしかしたら小山田さんがおつしやつたようなものがあるかもしれません。鬼ノ城にも、もしかしたらそういうものがあるかもしれない、と思いました。

それから、海野聰さんのお話もとても興味深く思いました。僕は渡来人をおもな研究テーマの一つにしておりまして、瓦も勉強しているのですが、先ほど海野さんがしきりにおつしやつていた、実際に事業プランニングする人と技能者、作業する人の違いは、まさにそのとおりだと思います。以前、七世紀後半の法隆寺の建物が高麗尺を使つてているというお話を伺つたことがあります。今日のお話を伺つていて、やっぱりそうなのだと思いました。つまり、全てが全て最先端のことをしているとは限りません、というお話、これもその通りだと思いました。それからもう一つ、この報告の中で注目しましたのが七世紀の多様性です。これも先ほどお話ししましたように僕自身瓦を勉強しています。そ

して、七世紀の瓦の多様性を実感しています。以前、近畿地方の瓦を検討する機会があり、朝鮮半島との関係について検討したことがあります。近畿地方の七世紀の瓦は、僕が「主流派」と呼んでいる、飛鳥寺の瓦、山田寺の瓦、川原寺の瓦などがある一方で、その流れとは別に渡来系の氏族達が使った別グループの、僕が「非主流派」と呼んだグループの瓦があることがわかりました。この「非主流派」の瓦が多様で面白いのです。一度、奈良文化財研究所の方にこの「非主流派」の瓦をテーマに検討会をやつてもらいました。やはりかなり個性的でした。そして面白いことの一つとして、山城と河内の瓦のなかに当時の中心地である大和や飛鳥を経由せずにつながる瓦があることがわかりました。岡山の備中地域に秦原廢寺という秦氏関連のお寺だと言っているところがあります。ここでの瓦は確かに京都の広隆寺の瓦と似た瓦を使っています。「渡来人ネットワーク」っていうものがあるみたいですね。だから今回の海野さんの話、僕にとっては素直に納得できました。とても興味深く、とても嬉しかった発表でした。

そして最後に、吉村武彦さんのご報告です。吉村先生は皆さんご存知のとおり古代史の大家で、僕もいろいろお世話になつてている方です。吉村先生のおもな研究対象は文献史料ですが、考古学の方にも凄く詳しくて、いろんな情報を仕入れられています。今回の御報告も横穴式石室などまさに考古学そのもののお話をされていました。

を、きちんとこなしていただいていて、そしていろんな関係史料もずらりと出していただいています。まさに、これからの中のシンポジウムのベースになるお話を聞いていただいたものと思つております。特に有明海の問題であるとか、交通路の問題もそうですし、肥後の渡来系の人々の話が今後どうなるのかというところも出していただきました。最近、福岡大学の桃崎祐輔さんも述べられていますが、熊本県内で馬を埋めた穴、馬土坑というものが結構確認されていて思ひます。馬土坑に関しましては、長野県とか群馬県など有名ですが、福岡でも筑後で確認され、熊本にもかなりありそうだと思います。これが分かってきております。熊本の馬、その馬関係にはおそらく渡来系の人が絡むと思ひますので、その辺も今後の課題なのかなと思って拝聴いたしました。

さて、このようにいづれのご発表もとても勉強になつたのですが、瓦の話はあまり出ませんでした。瓦の文様や技術は朝鮮半島との関係を解明する一つの手がかりになりますので、少しだけお話をさせていただきます。鞠智城跡の瓦は、以前から百濟系だということになつていて、僕もその責任の一端を担つていて、大宰府の、大野城跡の主城原地区で出土した古い瓦に関しましては僕も百濟系でいいんじやないかと、もう四十年前に言つたことがあります。熊本の島津義昭さんや鶴嶋俊彦さんたちがなされた鞠智城跡瓦の検討の中でも百濟系となつていてると思います。当時は破片が小さかつたんですが、その後、全体像が分かる大きさの瓦も出てくるようになり、改めて検討されるようになりました。まず、いつも採めることではあるんですが、鞠智城跡の瓦はいつの瓦なのか、七世紀の後半のもの



スライド1

なかなか、あるいは七世紀末の修理された時のものなのかという問題があります。こちら（スライド1）の出土土器の図をご覧ください。真ん中に土器がありますね。2番、3番、4番、5番の土器は64号建物に伴つていて、この鞠智城最古の軒丸瓦がいつしょに出ています。これらの土器をそのまま見ますと、やはり、七世紀の終わり頃の土器が伴つてありますので、鞠智城跡Ⅱ期になると思います。

少なくとも建て始めた時の資料はよく判らなくて、瓦には七世紀末頃の土器が伴つていていますねということになります。それから、これら一番上、1番の土器が16号建物に伴つています。これはちょっとと古いんじゃないかという考え方もあるのですが、見方によつては七世紀の中頃くらいまで下げるとは可能なのです。つまり、この辺が創建段階でいいのかなと思つていてます。以前、木村龍生さんが鞠智城跡出土の土器について論文を発表され、僕はすごく喜びました。1番の段階の土器が少なくて、2番から5番の段階の土器がたくさん出ますので、これと同じように瓦を使つた建物も鞠智城Ⅱ期、七世紀末の辺かなと思つております。

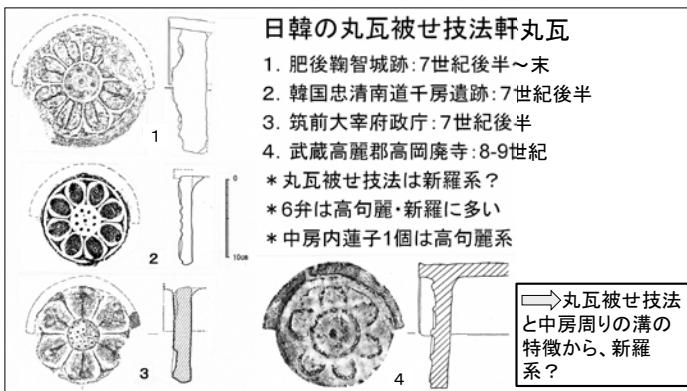
次に、瓦の系譜の話です。まず、スライド2の上二つの写真が



スライド2

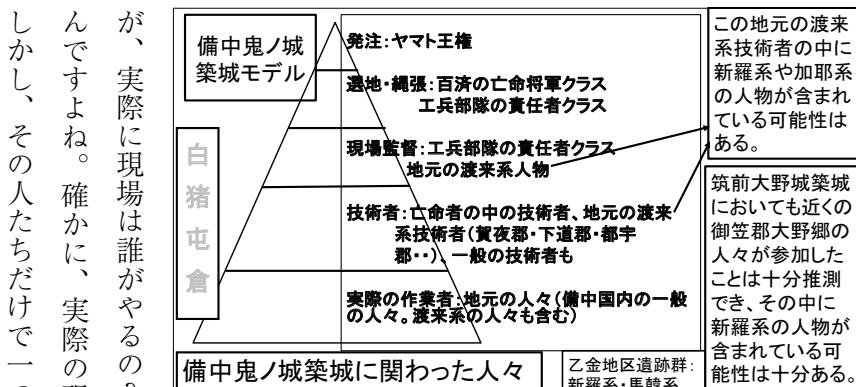
温故創生館に展示されている瓦の写真です。特徴としまして、普通の軒先瓦には周縁といつて瓦の外側に少し高い縁、外縁、このような縁が丸く巡るんです。しかし、鞠智城の瓦に関しましては、ご覧のように周縁が上半分しかありません。下半分にはないんです。この特徴はとても大事なことです。このような瓦は極めて特異です。韓国でもほとんど出ていなくって、日本でも四か所ぐらいにしかないです。そんな瓦が鞠智城跡で出ています。大野城跡の一一番初めの瓦だと言われているこの瓦(スライド2の下左)は、百濟系かどうかまだ決まっていません。僕は昔、百濟と思うと言つたんですが、最近は微妙かなという意見も出ています。それから、このスライド2の下例の右側三つが新羅の瓦です。スライド2の下例左から二つ目の瓦は百濟地域だった忠清南道で出ていますので「百濟の瓦」といわれることがあるのですが、このような瓦は百濟の瓦の中では完全に浮いている文様でして、右側のグループ、つまり新羅の瓦だと思っています。かなり言い方がくどくなりますが、百濟滅亡後に新羅の人達が百濟地域に入ってきて、建てたお寺さんの瓦だ、と思っているのです。ここでは韓国で確認できる初期の瓦塔、焼き物のストウーパも出て

います。それが日本にもまた入つてくると思つています。この千房遺跡の軒丸瓦は外縁が上半分しかありません（スライド3-2）。右端の月城跡の瓦は、外縁が全周する新羅瓦の一つで、中房のまわりに溝があります。この中房のまわりの溝は新羅瓦の特徴だと思つています。そういう意味で、鞠智



スライド3

城跡の瓦の中房のまわりにも溝がありますので、この瓦は新羅との関係が無視できないのではないかと思つています。スライド3の一番上に鞠智城跡の瓦がありますが、上半部を点線にしていました。この2番の千房遺跡の瓦もそうです。これが今のところ瓦当の上部に丸瓦をかぶせたグループのなかで確認できる一番古い、おそらく七世紀の後半の瓦だと思つています。3は大宰府で出土している瓦です。出土点数は少ないですが、大宰府政府の付近などで出土しています。この瓦の特徴は六弁です。百済瓦は八弁が多いので、六弁だったら新羅系でいいんじやないか、と僕は思っています。それからもう一つ面白いのがこの4番の関東の高岡廃寺の瓦です。時期は、八世紀後半から九世紀代のものと考えています。これも丸瓦が上にかかるだけです。そして、この瓦の特徴は、真ん中の中房の中にぽつんと一個、蓮子があるだけです。このよ



スライド4

うな中房の蓮子の表現方法は基本的に高句麗瓦の特徴です。そしてこの瓦が出ている場所は古代の高麗郡（こまぐん）、七一六年に東国の高句麗人千七百九十九人を集めてつくったという高麗郡の地域です。そこで出ているんです。そして、このような瓦は高岡廃寺だけじゃなくって、その周辺でも出ているようです。このよううに高岡廃寺の瓦は明らかに文様が簡略化し、かなり崩れていますが、丸瓦を上に被せる瓦です。このような珍しい瓦が鞠智城で出している意味を考えるときに、やはりその多様な入り方は重要なだと思います。

すいません。長くなつて申し訳ありませんが、いよいよ最後です。以前からこういう話をしますと、なぜ百済系の朝鮮式山城で新羅なんだ？ってよく怒られるんです。でも、発注はヤマト王権で、選地などのプランニングは百済の將軍クラスでもよいのです。実際に現場は誰がやるの？って話なんですね。亡命してきた百済の人たちだけでできるわけがないですね。確かに、実際の現場監督は、百済の工兵部隊の責任者クラスの人物でよいと思います。しかし、その人たちだけで一つの山城を造ることができるかというと、そうはならないだろう、とい

うのが僕の意見です。スライド4の築城に関わった人々のピラミッド図は、岡山の鬼ノ城をモデルに作ったものです。現場監督や技術者のところに地元の渡来系人物って書いていますが、この鬼ノ城がある地域は、律令期に賀夜郡になります。「カヤ」郡です。僕、岡山に四十年ほど前に移ってきたのですが、その時から「賀夜郡」という地名が気になつていきました。そしていろいろな発掘調査が進む中で、加耶系の考古資料が増加し、考古学的にも「加耶郡」で構わないと思うようになりました。少なくともこの地域の五世紀代の朝鮮半島系考古資料はほとんどが加耶系のもので、加耶の地域の人たちがこの吉備の地にやつてきてている。さらに五三二年や五六二年に加耶が新羅に合併された時にもこの地域に渡つて来たのではないかと思つています。そのような渡来系の人たちの中に築城技術を持つていた人がいた可能性はあつてもいいのかなと思つています。さらにその下の技術者の中にもいろんな渡来系の人が入つていています。吉備の場合だと賀夜郡阿曽郷、それから下道郡とか都宇郡とかに渡来系の人々の名前が確認できます。そして同じようなことが、筑前の大野城でもあるんだろうと思つています。大野城市で大野城について講演させていただいたことがあります。そのときにこのような話をしましたら地元の方から、新羅が何で入るんや?と質問が出たんです。大野城の古代の地元の一つは御笠郡大野郷です。この大野郷は大野城の北・西側の地域で、近年の発掘調査で新羅系の土器がたくさん出ました。ですから単純に、古代山城は百濟系だから百濟人が造つたんだ、では済まないんじやないかと思つています。それから、例えばこの鞠智城でしたら、菊池地域の人たち

が、関与するつていうのは当然あり得るし、その中にもしかしたら渡来系の人も入っているかも判りません。先ほど申し上げた馬関係の話も、熊本県内の北の方でもありますので、まだ分かっていない渡来系の人達の存在つていうのが、この辺で判れば、こういう話もできるのかなと思つております。ということで、この瓦に関しては絶対新羅だという気はございませんが、新羅的なものは無視できないんじゃないかということで、お話を申し上げました。すいません。

佐藤 長

小山



ありがとうございます。今日の四人のご報告を踏まえた上で、瓦については、渡来系の瓦の多样性を考えなくてはならない。また、築城の造営過程についても、いろんなレベルがあつて、トップに技术を持つた百济からの貴族が来ていても、その下で、例えば地元に古くから渡来してきていた人たちの中には必ずしも百济系でない人がいる場合がある、あるいはその中間の技术者にも多様なあり方があるのではないか、というお話をでした。ちょっと亀田さんに確認させていただきたいんですけど、鞠智城で出土した瓦は、かつては百济系というふうに私達も理解していたわけです。しかし、小田富士雄先生が高句麗系の百济系だと、高句麗百济系瓦だというふうにおっしゃった時には、私も驚きました。さらに、百济系の新羅系だという説もあるようですね。

亀田さんは、新羅系の可能性もあるとおっしゃったのですが、その辺をちょっと御説明いただけないでしようか。

亀田 はい。高句麗百濟系といいますのはちょっと複雑ですが、お話しします。瓦仙人って言われた藤澤一夫先生という瓦の大先生がおられて、古い百濟の瓦の中には中国の南朝系の百濟瓦ともう一つのグループの高句麗系のものがあり、それらが日本に来ているんだっておっしゃっていました。そして、畿内には、確かに両方の特徴をもつ瓦があるというのです。僕はそれを踏まえた上で、もう二年近く前になりますが、奈良文化財研究所を中心に瓦の研究会をやつてる時に、それだけでは説明できな瓦があるのではないか、ということで高句麗新羅系という言葉を使いました。なぜかといいますと、新羅は、古代寺院造営につきましては高句麗や百濟より遅れます。新羅の古い段階のお寺と瓦は、高句麗系の技術と百濟系の技術で作られています。ですから、瓦の文様も二通りあります。このような寺院造営関係のお話は、海野さんの世界なんですが、新羅の皇龍寺というお寺さんの塔を造るときに百濟から工人が来たと書かれています。実際に、そういうことも起こっているのですね。瓦の作り方でいえば、まさに技術的な部分で、見て真似できるものと見ても真似できないもの、つまり見えないところの技術はやはり人が動かないとできないよねって思っています。日本列島最古の本格的な寺院である飛鳥寺で、片ほぞ状二回ケズリという特殊な軒丸瓦の作り方の瓦が見つかっています。

その作り方は百済のものであることを、学生時代に百済地域に留学したときに発見したのですが、同じような作り方のものが新羅にも入っています。つまり、百済の工人が新羅に行つて作っているのです。文様も明らかに百済系です。このような瓦を見るとやはり百済新羅系と言わざるを得ないのかな、というお話を二十年前に奈文研で発表したことがありまして、同じようなことが、高句麗新羅系の瓦にも起こっているだらうと思つています。そう意味で区別はすごく難しいですという前提で、中山圭さんが鞠智城跡の瓦を百済・新羅系と書いています。中山さんも、百済と新羅の区別が難しい、とおっしゃつていています。ただ少なくとも、新羅にもこのようなものがあるので単に百済系というだけではないでしょ、ということをおっしゃつています。さきほどの技術的な部分で、日本の中も韓国の中もそうなんだと思つています。つまり、高句麗と百済と新羅はその関係が結構ぐちゃぐちゃになつています。さらに近頃の瓦の研究では、中国の南朝の瓦は百済に行つてますが、どうも新羅にも入つているようだといわれ始めています。あの辺も単純ではないのでA、B、Cでパパパッと割り切れるか、といったらそうではないでしょ、ということです。分かりにくいかと思いますが、人の移住のことも含めて検討していくますと、そう簡単には割り切れませんね、という話です。

佐藤 ありがとうございます。丁寧に補つていただきました。

今日は時間があまりないので、大きく二つのテーマについて議論をしていきたいと思つております。

一つは、今お話があつたような渡来系技術とは何か。今、何が百濟系で、何が新羅系で、何が高句麗系で、何が南朝系かというのは、それぞれが混じっているというお話があり、南朝経由の百濟系もあるし、高句麗がかなり影響力を南に及ぼしたときには百濟も新羅も影響を受けていたわけです。だから新羅のものでも高句麗系のものもあれば、そうでない百濟系のものもある、というような話なんですね。そうすると私達が一言で渡来系の技術や渡来系の遺物といつても、今日の話だと多様性があるということになる。そして、海野さんの「報告でも、いろいろな系譜があつて一元的には言えない」というお話があつたと思います。また、小山田さんのご報告の中でも、溜め池の技術について新羅系の雰囲気もあり得る、というお話がありました。ですから、初めに渡来系の技術とは何かということを最初に議論した上で、その次に鞠智城における渡来系の技術をどう捉えるかという、もっと長谷部さんのご報告に近づいた具体的なお話をしたいと思います。

それでは最初に、渡来系技術の重層性あるいは多様性といったことについて、もう一度小山田さん、今日のお話で、土木における渡来技術について大変勉強になるお話を聞いていただいたのですが、土木における渡来系技術の捉え方についてお話いただけないでしょうか。

小山田宏一　古代東アジアにおける補強土工法の拡散という地図をご覧いただきたいと思います。そ

の中で古代日本に見られる補強土工法が渡来系情報なのか、という問題は、日本国内に在来的な技術

として存在していたのか否かということがポイントになります。そこで鞠智城の水汲み場の堤に見られる補強土工法ですが、大阪の龜井遺跡、関東地方の三ツ寺遺跡では、五世紀の後半から末頃に、堤（龜井遺跡）や盛土（三ツ寺遺跡）では草本、粗朶、樹皮を敷設しております。このことから、鞠智城の事例は国内の伝統を引いているという考えも当然成立するわけで、事例の比較だけでは単純に結論を出すことは難しいです。やはり、鞠智城の事例を考える場合、鞠智城がどのような歴史的な環境の中で出現したのか、鞠智城をとりまく歴史はどうなのかななどという要素がとても重要なになってまいります。こうした理由から、当時の緊迫した東アジア情勢、それに対する倭国のいろいろな対応などを考えますと、やはり鞠智城の技術は山城の造営にともなって新しく入ってきた、導入された技術であると解釈できると思います。

佐藤 ありがとうございます。私も鞠智城の池ノ尾門の発掘調査を見た時に、城壁の下をくぐる水路の蓋石が並んだ様子を見て、古墳の天井石の並べ方とすごく似ているな、と思つたことがあります。そういう在来の技術もあるのかと思つたのですが、そういうこともあり得るということでしょうか。

小山田 はい。あり得ると思います。

佐藤 ありがとうございます。

では、海野さんいかがでしょうか。今話になつてゐる渡来系技術の多様性を建築の方からお話しいただきたいのですが。

海野聰 建築に関しては、まず現存するものはどうしても数が限られてしまうというところで法隆寺の特殊性というのが際立つています。それが単に七世紀、八世紀という切り分け方だけではなくて、やはり八世紀以降のいわゆる律令的な技術の体系に対して七世紀というのを考える必要があります。もちろん八世紀以降にも唐の技術が入つていて、ここからの影響がないってわけじゃ決してないのですが、限定的で、たぶん渡来系の影響が強いというものは七世紀の段階での話になります。その上でやはり技術的な話で言えば、伝統的な技術に対して外来的な技術として取り込んでいるものがやはり渡来系の技術です。そして、渡来系のものというのも、例えば形も、構造的なものか、あるいはその形態が持つ意味、理念的なものなのか、という点も重要です。理念的なものまで含めて完全に模倣する、あるいは撰取をするという段階、そこら辺のところが渡来系技術と日本列島で模倣した技術の差となるでしょう。さらに言えば、そこから自身の中で理解をして再構築をするという段階になると、それが今度は倭国あるいは日本の伝統技術として昇華されていきます。そういうプロセスがある前半、初期の段階のものが渡来系技術と捉えられると考えています。

佐藤 どうもありがとうございます。八角形の建物についても、单一の入り方をしているか、重層的な入り方をしているか、というご報告がすごく面白かったです。もう一つは、建築の場合は必ずしも最先端の一番新しい工法を用いるかというと、そうでなくて伝統的な工法で建てる場合がある、とうお話。それも考えなくてはいけないと思いましたが、八角形の建物に関してはいかがでしょうか。

海野 そうですね、まず八角形ということで言うと、やはり信仰性というものは強いと考えています。それは現存する建築もそうですし、近年の菅原遺跡の円堂の発掘など、さらに言えば建てられなかつた西大寺の八角塔なども含めて、やはりそういう精神的な中枢部で考えていく方が現実的ではないかな、と思います。

もう一つが、実際に建築が最先端かどうかというお話が今ありましたけれども、ちょうど七世紀の中盤から後半にかけてというのは、日本の中で中国的な宮殿といわゆる伝統的な内裏の関係でも、内裏は最先端の施設かという点を考える必要がある時期でもあります。いわゆる大極殿を代表とするような中国的な建築を導入して、律令国家の体制を整えていく、インフラ整備していくことが最先端として行われています。その一方で、やはり伝統的なものの技術、あるいは形態を継承していく、それにも価値を与えているわけです。こうしたものが同時併存している。その時点ではすでに重層している社会の様相がよく顯れている時代だと思います。

佐藤 確かに、奈良の平城宮やそれ以降の平安宮においても大極殿や朝堂院という公的な政務や儀式の場所は礎石建ち瓦葺きの大陸風の建物ですが、天皇が日常住んでいる内裏では伝統的な掘立柱で檜皮葺きの建物を建てるということですから、同時併存であることが普通にあるというのはおっしゃるところですね。

あと、鞠智城の八角形建物は二棟あつたと思うのですが、高句麗でもそういういた宗教的な意味を持つような建物が二棟セットである場合がありますよね。難波宮にも内裏の南門の両側に八角形の仏堂みたいな建物が二棟並んでいます。あれも儀式の場のように使われていると思うのです。二棟並んで、二棟あるのもそういう一定の儀礼との関係というのになるのでしょうかね。それは難しいかな。

海野 ちょっと難しいご質問なのですが、鞠智城の八角形遺構、私も少し検討しましたけど、なかなか建物配置と遺跡内の軸線が明確に一致してこないんです。他の部分の、例えば倉庫群等の規格的な配置に対しても、ちょっとずれてくるところが引っかかるところではある、というところですね。

佐藤 これまでのお話を受けて、吉村さん、渡来系技術の捉え方について広い立場からお願ひします。

吉村武彦 はい。実は今やっている議論はかなり重要な問題を含んでいると僕は思うのです。つまり、

在来系か渡来系かという時に、果たしてそういう二分法でいいかどうかっていうことですね。というのは、最近、国風文化論をどう捉えるのかというのが平安時代の方で非常に盛んになつていまして、単純に言いますと遣唐使の廃止以降、国風化するということなんですねけれども、その国風化の内容はどうか、という議論があります。いろいろ論文を見てていきますと、実は単純な古い伝統ではなく、かつて、つまり渡来系の人が日本に持ち込んだ技術の再評価をして、また進めていくということらしいんですね。ですから、在来系か渡来系かという議論の以前に、在来系とは何かということもあるんですね。ある意味で言うと、二分法で考える場合、渡来系というより最新の渡来系技術ですよね。それで、在来系といつても、本当に伝統的な手法なのかどうかです。

例えば古墳で言えば、前方後円墳では竪穴式石室は伝統的と言つていいんでしょうか。そこに横穴式石室が受容されます。この石室は、中国の地下式の影響があるかどうか、いろいろ議論があります。それが朝鮮に入つて、やがて日本に入つてくる。その時に九州系の人達はすぐには理解できなかつたようで、竪穴式と関係する横穴式になります。そして、百年ぐらい遅れて、近畿地方の人が大王墓とかに利用するようになるわけですね。だから伝統的技術という場合も、我々、伝統というと何か全て日本人的なものと理解しやすいのですが、はたしてそういうものでしようか。

また、音楽なんかもそうですね。雅楽といいますが、本当に在来系というのは吉野の国栖舞とか、あまりないです。だいたい向こうから入ってきた呉樂とか、高麗樂とか。それを日本人という

か当時の倭人は上手くこなして、日本のものを作り、ということかと思うんです。そういう意味からいと、議論あまり在来系とか渡来系とかを単純に捉えない方が良いだうと思ひます。それぐらいです。

佐藤 ありがとうございます。本日は渡来系技術から見たというテーマですが、これは古代山城を築いた時代の最新の渡来系技術というように普通は考えております。確かに日本におけるいろいろな技術は、大陸や半島から常に渡つてきていますから、どこまでが在来でどこからが渡来かというよりも、いつも渡来を受けとめて上手にこなしていったのが日本の文化の特徴というように考えた方がいいかな、と思いました。

今の渡来系の話につきまして、長谷部さん、鞠智城を調査しているお立場からいかがでしようか。

長谷部善一 鞠智城に今年の四月に来たばかりで今ちょっと勉強している途中の身には非常に難しい質問ですね。でも、鞠智城が建てられた菊池川流域というのは装飾古墳が多く築かれている地域でもあります。鞠智城に見られるような版築といふものは、装飾古墳の築造にも使われてきた在来系ともいえる技術であります。それが直接、鞠智城の渡来系と言われるものと結びつくのかは私の方もまだ、判断がつきかねます。そういった古墳の石室、石材を押さえるための版築状のものをしてきた地

域ではある、といふところがあると考えています。

佐藤 ありがとうございました。

これまで、渡来系技術の多様性について考えてまいりました。その渡来系も、それぞれの時代での最先端の渡来系という考え方があるということ、そして渡来系という中でも、朝鮮半島で高句麗・百濟・新羅がある時代、あるいは加耶がある時代、それをお互いに影響し合いながら日本列島に渡つてきているということで、それらをどう捉えるかはなかなか大変です。遺物を理解するのも、瓦の理解だけでも先ほど見たようにいろいろなとらえ方があるので、本当に大変なことになります。それだけ東アジアの世界が相互に交流しながら、密接に繋がりながら、お互いに影響を与えたのだな、と思います。

また、渡来人あるいは渡来系移住民という意味でいくと、日本列島の人も朝鮮半島に渡つていて、加耶で前方後円墳が出てくるのはそういう人達だと思います。また、熊本の日羅という人は火葦北国造の息子でありながら百濟で二番目の官位の達率をもらう高位高官にまで昇つていて、政策顧問として戻つてきてくれ、と倭國の大王が日羅に求める話が日本書紀にあるほどです。倭から向こうに行つた渡来系住民、渡来人もいた。このように列島・半島間の渡来については相互に考える必要があると思します。

それでは、もっと鞠智城に焦点を当てた形で、鞠智城における渡来系の技術はどうかというお話をしたいと思います。

今日一番初めに長谷部さんのお話で、鞠智城においてこれまで渡来系技術と考えていたこと、版築のやり方とか、それから貯水池のあり方だとかについてお話がありました。この版築や貯水池のあり方にについては、小山田さんのお話もありました。なお版築については、これまで亀田さんがお考えになっていたと思うので、その版築についてのお考えを伺いたいと思います。それからもう一つは石積みですね。これについても亀田さんが研究なさつてたと思いますので、まず亀田さんから鞠智城の技術についてお願ひしたいと思います。

亀田 まず版築ですが、実は、定義が最近また難しくなつてきております。國學院大學に移られた青木敬さんという方がその辺を整理されています。実は海野さんや青木さんが奈良文化財研究所におられたころ、奈良の薬師寺の東塔を発掘していました。その時にお邪魔したんですが、青木さんという方は、まさに古代の土木技術に大変詳しい方



で、「棒で突いて地面を硬くするのが版築の基本だ」とおっしゃっていました。僕たちが勉強したころの版築は、「外側に堰板を巡らせ、その中の土を棒で突き固めるのが版築」と習っていたんですけどね。結果的に薬師寺の場合は外側に堰板があつたのか、なかつたのかっていうのは、どうなつたんでしょうか。

海野 確か明確には出ていなかつたと。

亀田 明確には見えなかつたのですよね。といいますのが、実は堰板があればその端っこは、棒で突くと斜めに上がるんですよね。それが薬師寺の東塔の場合、礎石のところでは突き棒の痕跡は、まさにそのようになつていたのですが、基壇の端のほうではそのような明確な痕跡がわかりませんでした。それで、青木さんに、この基壇、堰板を使つていたでしようかねっていう話をしたのです。実は日本の古代寺院の場合、基本的に版築って言つているものには、もしかしたら堰板がないのもあるかもしれない、っていう話が建築の方でもあるんですかね。

海野 ちょっと記憶が曖昧ですけれども、確かに可能性として考えたのは、堰板を置いてきちんと合理的に少ない労働力でやるであろうと今まで我々は考えてきたんですが、そうではなくて、完成する基

壇より少し大きいところで造つて、版築の端を切り落として造つてあるんじやないか、と考えたと思します。要はケーキの切端を落とすという、そんなような造り方をしたのではないか、そういう考えもできるんじやないかというのが、現場で検討した考え方だつたと記憶しています。

龜田 はい、そうしますと今までの定義ってどうなるんだろう？つてことも含めて考えなければならなくなりますよね。中国ではきちんと堰板を使つていてる例がありますので、朝鮮半島に入つたときに変化したのでしょうか？少なくとも、岡山の鬼ノ城の版築を調べたときに、前面には当然堰板があります。そして、横板があつたかどうかという確認をやっていきますと、ちょうど横板があつたと想定されるところの版築層がやはり上がるんです。ということで鬼ノ城の場合には、少なくとも前面と左右の合計三面には堰板があつたと思われます。また、大野城にも堰板はどうもあるようですが、それが鞠智城にあるかどうかっていうと実はまだよく判りません。ということで鞠智城では、今後、意識的にまた掘つていただければと思つています。

それから、前面の堰板さえなかつたんじゃないかつていう例が岡山の大廻小廻山城です。このような見方をすると版築の仕方にも幾つかグループ分けが出来そうだね、というのが見えてきます。そのような見方で改めて鞠智城の版築を調べていただくと、グループみたいなものも分かるのかなって思います。そういう意味でも版築のあり方っていうのが、先ほど海野さんはじめ皆さんが仰つている日

本化とかいうことなのか、技術者がいなくてそうなったのかとかいうのは、やはりそれぞれの例に当たらなきやいけないのかなって思っています。

それから、石積みに関しては、鞠智城の石積みはちょっとまだ難しい状況ですね。もう少し調査が進まないといけないと思っています。確実に石積みで古代山城を造っている例は対馬の金田城だけです。岡山の鬼ノ城も石をたくさん使っています。復元されて有名な西門の横に高石垣と呼んでいる部分があるんですが、僕は積み直しだと思っています。地元の方と意見が違うんですが、高石垣はお城が生きてる（使用されている）段階の積み直しだと思っています。なぜかといいますと、石垣の裏側の掘方が弧状になつていて、つまり一回崩落したから積み直したんだと思っています。さらに言いますと、だからこそ正面からみた石垣の形がおかしいと思っています。本来であれば石垣の左右の端は真っ直ぐ上がっていくものと考えています。石垣の壁が、山なりになつてるのは積み直したからだと、僕は考えています。そして、大野城の石積みに関しては、比較的多くの場所で積み直しされていますから、僕にはオリジナルがよく分かりません。そういうところも含めて、石垣に関しては改めて調査検討しなければならないと思っています。

佐藤 基肄城はどうですか。基肄城の水門。

亀田 基肄城の水門も、おそらく皆さん、答えが出てないと思います。基肄城には昔からの大きな水門がありますよね。あれが当初のものなのか、それとも後世のものなのか判つていません。と言いますのは、水門の向かって左側の崩れた部分を二〇一〇年頃から発掘しましたら、中に小さな水門が三つ見つかりました。あそこも前面はほとんど崩れていきました。そんな事情で残念ながらもう一つよく分かっていません。今回の基肄城の三つの水門も、後ろ（城内）側は掘つていないと思います。このような石組みの城壁はやはり前後左右をきちんと確認しないと、単に表面から見た石積みだけでいろいろと発言するのは、やはり難しいです。水門の後ろ側を掘つていただき、積み直しがあるかないかも検討しないと、なかなか分かりません。繰り返しますが、基肄城の門のところの大きな、立つてでも入れる（ちょっとオーバーですが）、腰を屈めれば入れる、水門ですと、敵が入ってきますよね。実際に小さな水門が三つ出てきましたので、やはりあの辺も、もう一度検討する必要があるのかなと思っています。ということで、石積みに関しましては、申し訳ありませんが、あまりよく分からぬのが現状です。

佐藤 はい。ありがとうございました。

では小山田さん、鞠智城について今日のご報告にもありましたが、もう一度今までの話を受けとめて、いかがでしょうか。

小山田　亀田先生の、新羅には南朝の瓦が入っているという話は、とても興味深く拝聴しました。実は新羅には「塙」と呼ばれる水利施設があります。慶尚北道の菁堤という溜め池の碑文を見ますと、の築造技術自体は百濟で始まつたと考えています。一方、「塙」は中国の南朝に多く、「塙」が新羅に出現することと、南朝系瓦の出現は共通する点がありそうで、ちょっとゾクゾクしました（笑）。技術の話ですが、私が扱っているのは、堤の補強土工法という限られた範囲の土木技術になります。大事なことは、補強土工法を使って堤を造るプランを鞠智城造営の土木技術者が持っていたということです。補強土工法の入手方法などが分かれば、より具体的に技術の系譜が辿れるものだと思います。ただし、考古学だけでこの問題を解決するのは難しいようにも思います。

佐藤　日本国内の他の山城とか、あるいは溜め池でもいいのですけど、いかがでしょうか。

小山田　古代日本では溜め池を除くと、補強土工法を使っている堤はあまりないような気がします。溜め池ですが、大阪の狭山池と久米田池、福岡県ですと京都郡の池田遺跡などがあります。溜め池の場合、堤の補強土工法だけを切り取るんじゃなくって、溜め池を造る技術体系の一つとして補強土工法を理解・評価しなければなりません。鞠智城でも補強土工法をふくむ技術体系が問わることになり

ます。

佐藤 粗朶敷きについては、私、福岡県の大宰府の水城の西門、あるいは御笠川沿い、鉄道沿いのところの粗朶敷きが一番見本的なものと思っています。あれはどうでしょうか。半島との関係も含めて、粗朶敷きや補強土工法としていかがでしようか。

小山田 そうですね。水城の粗朶敷については、佐賀大学にいらっしゃった林重徳先生のご研究があります。水城は真ん中に御笠川があり、その近くで地盤が軟弱なところは何層にもわたり粗朶を敷いています。ところが、西の丘陵に取り付く西門付近は地盤が固く、粗朶の敷設は見当たらぬようです。このような特徴から、水城では地盤の状態に適した工法で施工していると復元できるわけです。この場合、地盤の強弱に応じて工法を使い分けるという経験がなければ、現場で的確に指導・指揮することは難しいと思います。このようなことを考えると、扶余羅城で地盤の強弱に応じて工法を工夫している百濟の情報と考えてよさそうです。

佐藤 水城の場合は六六三年の敗戦の後、六六四年に造っているということで、百濟の技術を割と直接的に導入してできたと思つてよろしいですよね。渡来系の技術というと、水城の西門などで柱を埋

め殺している工法がありますが、それも朝鮮半島系の技術と思つてよろしいでしようかね。

小山田

ソウル特別市の風納土城は百濟最古の王城で、これまでの調査によると、城壁の版築工事で、堰板を留める柱を抜き取らず、そのまま埋め殺している事例が確認されています。このような工法は山城の報告書にも確認できるので、韓国では広く行われていたように思います。

佐藤

ありがとうございます。海野さん、先ほど、八角形建物について質問したのですけれども、建築史の立場から、鞠智城における渡来系工法について、何かコメントいただければありがたいです。

海野

はい。八角形以外にもやはり注目すべき点というのがあって、一つが規格性の問題だと思います。例えば、大野城を始めとする他の倉庫群で施工精度が相当高い制度で施工されているのに対し、鞠智城がどういう精度でなされているのかという点です。これに関しては、遺構の施工精度というところというところと、先ほどの在地で実際誰が施工したかというところにも関わってくる問題かと思しますので、一つの検討材料になると思います。

もう一つが、やはり城門に関するところ、特に柱間装置、そして扉をどう設置するかに関連するところです。建築の側からすると、古代山城といえば軸擦穴のある礎石というぐらい、やはり密接に関

係していると思います。それは先ほどの私の報告でも申しましたように、山田寺などでは地覆石に穴を彫る例はありますけれど、日本では基本的に木の部材に穴を開ける方が一般的です。これに対しても、古代山城に関しては石製の軸擦穴を持つものとなります。渡来系の技術であっても少なくとも日本に入ってくると基本的に石じゃなくて木でできるものは木で造るという方向に変わってくるのが大まかな傾向としては多いのです。ですから、山田寺の技術系統と解らないですけれども、やはり古代山城の石製の軸擦穴は着目すべき点だと思います。

佐藤 鞠智城の城門には、扉を立てるための唐居敷があります。扉の両側の柱を据えて、その間に開く扉を設定するための設備ですね。その扉板をギーと開けるときの軸の穴が大きな石の唐居敷に刻んであって、堀切門の扉の幅は三メートルぐらいになります。門の構造自身も知りたいのですけど、扉の構造がある程度分かるということですよね。

海野 そうですね。門に関して、礎石の位置からある程度、規模なり、切妻の屋根なり、というのは想定できます。扉を受ける装置が石製というところに関して言うと、時代が下つてしまいますが、絵巻物等に描かれる門は、基本的に石製ではなくて木製の唐居敷で描かれることがほとんどです。というわけで、少なくとも後の時代の資料と比較をすると、石製というのはやはりこの時代、すなわち木

製の加工よりも石製の加工の方に長けていた時代の特徴と思われます。この辺は、半島系、大陸系、というところを強く示唆しているのではないかと思います。

佐藤 唐居敷は確かに花崗岩を使つていましたから、固い石を確保するだけの技術の高さもあつた、と
いうわけですね。

海野 そうですね。よくこういうときに私がお話をするのが、例えば高床の正倉院正倉ですと、通常、石を平らにして柱の長さを一緒にすれば、床の高さがきちんと揃う、と普通は考へるんですけども、必ずしも礎石の上面をきつちり高さを揃えて加工するわけではなく、柱の下面を礎石の凹凸に合わせているんです。石の加工が大変なのです。あるいは、平城宮第一次の大極殿院といった中枢の一角でも自然石を使つています。木の方を石に合わせるなど、普通で考へたら逆だと思うような方法をとるほど、石よりも木を扱う方が得意というのが日本の考え方です。そのため鞠智城の石製の軸擦穴が渡来系との関係が強いという考えは、こうした背景とすごくマッチすると思います。

佐藤 唐居敷に見られる扉の構造などは、渡来系の技術かもしない。

海野 渡来系の技術の要素が強く出ている。あるいは、少なくとも石の加工などについて言えば、渡来系の技術と見た方がよく、日本の技術でできたんだ、となると逆に、なぜそれ以降の時代には使つてないのか、という疑問が次に出でてしまつというところですね。

佐藤 扉を動かすときの軸に鉄を使つていますよね。きっと、それもありますよね。ありがとうございますが、いました。

吉村 さん、すいません。鞠智城に絞つたかたちで渡来系技術ということを議論しているのですが、一言お願ひできますか。

吉村 今日、小山田さんが報告されましたけど、曲池とか苑池とかの施設があるとすると、やはり鞠智城の存在理由ともつながりますね。鞠智城は、大野城・基肄城と同じように長く存在しますね。鞠智城の池遺構は必ずしも明らかではありませんが、そこから出ている水の流れが、仮に苑池とか曲池とかの機能に関係するようですが、鞠智城がなぜ造られたかということとも関係してくるので、重要だと思います。池という公の施設を造つたとき、何か儀礼が行なわれるような設備があるとしますと、そういう施設を作つた理由が関係してくるからです。

実はもう一つ、八角形の建物が話題になっています。これは前期難波宮にも二つあるのですが、天

皇陵も八角形なのです。推古朝以降、かなり後になりますが、その意図と意味が気になります。八角方面的支配、つまり八方の支配とかで説明する人もいますが、まだよくわからない。鞠智城を建設し維持する場合、何らかの祭祀が行なわれたことは間違いないだろうと思います。都でも国衙でも祭祀はやりますね。その祭祀のあり方というのは、今までの鞠智城の議論ではあまりされていません。

これまで遺跡では、わからない遺跡でも、これこれの遺構は祭祀遺構だ、と指摘することがありますね。下総の市川市史編纂事業の関係から、市川市の北下遺跡という水辺の祭祀に関心があります。最近では各地で水辺の祭祀の遺構が見つかって話題となっていますが、鞠智城の遺構が水辺の祭祀と関係があるとすれば、池を発掘すれば関連資料が出てくるかもしれません。それと関係して、八角形の建物が持つ意味です。今日、八角形の建物には二つの造り方があると言わされましたので、どちらの造り方をすれば、どういう意味を持つのか、ということがわかるかもしれません。そうすれば、この鞠智城における八角形建物の意味も明らかになるだろうと思います。

そういう意味では、曲池のような性格をもつかどうかということ、八角形の建物の用途が明らかになること、これら二つがわかれば、鞠智城の存在理由もかなり明確になるのではないでしようか。

佐藤 はい。大事なお話だと思います。苑池の場合は、それを鑑賞する建物が近くにあつてもいいか

など思います。あと、池の場合には多分、古代の日本の七世紀～八世紀の苑池だと、洲浜を築いたり、

立石があつたりしますので、それをどう考えるかということから遺構の評価をする必要もあると思います。水辺の祭祀をするような場所が苑池とか、今日説明のあつた水が流れているところであることはありえて、百濟の金銅仏が出土したというのも関係する場合があり得ると思います。

それ以外に儀礼の場を考えると、後の九世紀ぐらいの資料だと正倉院の稻穀を収めた倉庫群も出できます。古代の正倉院にもそういう儀礼の場はあつた、と思います。あと、古代の城は、単なる城郭だけではなくて、辺境を護るものですから、護りのための祈りというのは必ず付いてくるのです。これはお隣の福岡県の大宰府の北の大野城でも、ちょっと時代が下るかもしれないけれど、四天王が祀られて国境を護る祈りがある。私は鞠智城にもそういう祈りの施設があつてもおかしくないと思います。

さて、ここまでいろいろな意見が出てきたのですけれども、長谷部さん、鞠智城を護つて、また調査研究されるお立場から、今までの話を踏まえて、お話をお願ひしたいと思います。

長谷部

はい、今、鞠智城の城門をまず復元をして、今後の検討材料として使えるようにといふうなところで考えております。深迫門の発掘調査も今年もやっていますので、今日、話題となつた版築の見方、考え方もしつかりと捉えた上で報告書にきちんと反映させて参ります。

佐藤

当面、城門についての調査成果が報告書になるということで、大変楽しみにしたいと思います。最後に、ちょっと時間過ぎているのですが、会場に朝日新聞社の編集委員の中村俊介さんがいらっしゃると思うのですが、一言お願ひしたいと思います。

中村俊介

朝日新聞の歴史担当をやつています編集委員の中村俊介と申します。もう時間も過ぎていますので、手短に感想を言わせていただきます。

私、東京とか大阪とか福岡とかを行ったり来たりして仕事をしておりますけれども、先月大阪から福岡の西部本社に戻ってきたばかりなのです。生まれは熊本市なので高校まで熊本において、やはり鞠智城というのは非常に馴染みが深いところなのです。福岡において、先ほども何度も出てきました大野城とか基肄城とか、あるいは水城とか馴染みがあるのでけれども、そこには石垣とか礎石とかしかありません。

ところが、やはりこの鞠智城というのは非常に情報量が多い。そして話題にも事欠かない。溜め池といいますか貯水池もありますし、菩薩立像が出土したり、あるいは「秦」と書かれた渡来系の木簡も出土したりしています。今日もたびたび話題となつた八角形の建物は孝徳朝の難波宮と同じ時期ぐらいなので関係あるのだろうかとか、あるいは長者原伝説もありましたね。さらには、この立地が有明海を向いたものなのか、大宰府方面だけなのか、あるいは南九州の隼人とかも見据えたものなのか、

などいろいろと議論があつたと思います。そういう議論、古代の謎がギューッと凝縮されたところ、それがこの鞠智城ではないのかなと思います。

さらには古代山城の中で、大野城とかかなり山の中ですけれども、鞠智城は非常に行きやすい。復元建物もありますし、非常に見晴らしもよく、ピクニックにも行ける。温故創生館もございます。そういう意味では、この鞠智城は日本の古代山城の中でも非常にその活用に適したところではないのかな、というふうに思います。

こちら福岡の西部本社に戻つてきて、いの一番に熊本城に行つてきました。熊本城の天守閣、立派な博物館として見学施設にもなつておりますし、確かに「テレビ朝日系列」歴史の専門家が選ぶ難攻不落！最強の城総選挙」のトップになつたと思います。お城のトップ！この意味で近世の熊本城、それから古代のこれもトップ級の鞠智城がございます。先ほどこう君も鞠智城をどんどんPRしていくたいと言つていましたので、熊本においては鞠智城と熊本城のツートップ、古代と近世の二つのお城をどんどんPRして、そして活用していただければと思います。

私も報道の人間ですので、お手伝いを可能な限りしたいと思います。どうもありがとうございました。ちよつと時間が過ぎてしましました。まだまだ鞠智城を基に

佐藤

どうもありがとうございました。ちよつと時間が過ぎてしましました。まだまだ鞠智城を基に

た。

して古代史の謎に迫らなくてはいけない課題がいっぱいある。まだまだ勉強が全然足りないな、という感じがいたしています。今後とも、こうしたシンポジウムをまた開けるとありがたいと思いますので、どうぞ皆様も御期待いただくとともに御協力いただければ幸いです。今日はどうもありがとうございました。

亀田修一先生のコメントに関する参考文献と図出典

〔軒丸瓦の系譜に関する主な参考文献〕

- ・百濟系・島津義昭・鶴嶋俊彦ほか『鞠智城跡』（一九八二年）熊本県教育委員会など
- ・高句麗百濟系・畿内経由・小田富士雄「鞠智城創設考」『古代九州と東アジアⅡ』（一〇一三年）同成社
- ・百濟・新羅系・中山圭「鞠智城出土の軒丸瓦－朝鮮式山城古瓦の一様相－」『九州考古学』八〇（一〇〇五年）九州考古学会など

〔スライド図出典〕（左記以外は、亀田が撮影・作成）

スライド1・『鞠智城跡Ⅱ』（一〇一二年）熊本県教育委員会・『鬼ノ城』（一〇一〇年）岡山県立博物

館

スライド2・下列右側3点・『新羅瓦塼』（二〇〇〇年）国立慶州博物館

スライド3・1・3・『鞠智城跡Ⅱ』（二〇一二年）熊本県教育委員会、2・『千房遺跡』（一九九六年）

公州大学校博物館、4・『高岡寺院跡発掘調査報告書』（一九七八年）高岡寺院跡発掘調査会